慈濟

ものがたり

ツーチー　2018年12月　*264*

●表見返し　文・證厳法師
訳・済運　撮影・蕭耀華

生命の価値を発揮させる

一日が過ぎれば、それだけ命は短くなる。
煩悩に縛られて損得にこだわっていれば、
時間を無駄にし、生命も消耗する。

事や人、世と争うことなく、
時間を無駄にせず、良能を発揮し、
衆生を利して慧命を成長させよう。

目次

【社論】
敬虔が平穏をもたらす　慈願／訳　4

【主題報道】
迫り来る危機　八二三豪雨災害への援助　黒川章子／訳　8
地盤沈下とスーパー豪雨に遭遇して　黒川由希／訳　18
慈済はなぜ安心家庭訪問を続けるのか　高雪白／訳　34
大林慈済病院　災害支援医療から地域の長期介護まで　惟明／訳　40

【近所にいる親友】
青空環境保全ステーション　心婪／訳　49

【慈済国際災害支援・ラオス】
洪水の後　ダム決壊事故を支援して　済運／訳　60

【衲履足跡】
一念は一粒の種子　済運／訳　80

【證厳法師のお諭し】
苦が去った後の説法は永久に役に立つ　慈願／訳　86

【慈済国際災害支援・インドネシア】
待ちわびるアフガニスタン難民
街角から「希望の家」まで　本諦／訳　98

慈済大記事【十一月】　済運／訳　106

表紙

８月２３日、嘉義県布袋郡考試里の道路が熱帯低気圧の影響がもたらした豪雨で冠水した。慈済ボランティアは長靴を履いて、「観音菩薩」のように手を繋いで、慎重にゆっくりと村を視察した。（撮影・黄筱哲）

社・論

敬虔が平穏をもたらす

◎訳・慈願

八月のお盆（中元節）の期間中に、慈済（ツーチー）基金会は台湾全土で二十八回の「七月吉祥孝親祈福会」を催した。親孝行、斎戒を通して生物保護を訴えかける感動的な劇を公演し、観衆が自ら行動することに期待し、この世の人々のために祈った。

「私たちは台湾に住んでいることを常に感謝すべきです。感謝の心には敬虔さがなければなりません。その心がなければ、感謝しているとは言えません」。感謝の気持ちは祈福会の会場でだけ起こすのではなく、心の中の敬虔さから出てくるものでなければならないと證厳法師は大衆に期待した。そして、平穏な時に福田を耕して、敬虔さを示すべきであり、貪欲に利益を追求して、私たちの生きる拠り所である大地を破壊してはならない、とも諭された。

今年の五月から六月にかけての台湾の梅雨期の雨量は、予期したほどの量はなかった。数年に一度空梅雨（からつゆ）が発生する。八月二十三日から熱帯性低気圧と西南気流が発生したため、干ばつは解消したものの、逆に一週間続いた豪雨で西南沿岸地帯が冠水した。

気象予報士の分析によると、今回の降雨量は二〇〇九年の台風モラコットには及ばないものの、その年以降、台湾で最も激しい豪雨だった。現地は劣悪な排水と地盤沈下、高潮などの原因が重なり、水は容易に引かず、予想外に被害が深刻化した。

嘉義県と台南県沿岸の被災地では高齢化が進んでいる。働き盛りの世代は

外に出稼ぎに行き、残された被災者の多くは高齢者である。数多くの慈済ボランティアも被災したが、その翌日から村役場が調達したいかだや軍用車に乗って浸水した村落を回り、温かい弁当を届けた。また、水が引いた地域では、視察と慰問を行うと同時に清掃を手伝った。

これが今月号の主題報道である。全国からボランティアを十一日間動員して一万世帯以上の被災者を訪ね、緊急慰問金と慈善物資交換カードを届けた。また、後に弱者家庭の再建支援を実施するための調査を行った。さらに、被災した学校を訪れ、支援を必要とする家庭がないか、聞き取りを行った。

嘉義県にある大林慈済病院は県の衛生局（保健所に相当）の緊急医療活動に協力すると共に、避難所で診療を行った。慈済人医会と医療志業体が地域を超えて合同で結成した施療チームは、家庭訪問を行い、無料診療所を設置した。

南部水害支援と時を同じくして、慈済ボランティアは初めて災害支援のためにラオスを訪れた。同国のアッタプー県では、七月下旬にダム決壊事故が発生し、下流にある村落で洪水被害が発生した。慈済災害支援チームは現地の中華系ビジネスマンの協力の下に被災地を調査し、即席飯、携行食器、福慧ベッド（折り畳み式ベッド）、エコ毛布などを緊急に配付し、現地の自治体と共に中長期的な各方面のニーズを検討した。

異常気象が頻繁に天災をもたらしており、災害を防ぎきれない状況になっている。私たちにできることは、證厳法師が呼びかけているように、普段から敬虔な心を持ち、災害時には互いに助け合うことだ。こうして初めて、真に平穏な暮らしができるのである。

（慈済月刊六二三期より）

主題報導

迫り来る危機

八二三豪雨災害への援助

今も昔も、台湾で水災が起こると、慈済人は水をかき分けて移動し、被災の最前線へと弁当を届け、後方支援部は義援金や援助物資、掃除道具を準備する。

今年の八二三水災では、嘉義県と台南県の郊外では高齢化と地盤沈下が進んでいることが露呈した。

これらの地域では、ますます予測しづらくなっている豪雨に備えることは難しく、心もとないまま危機感を募らせるしかなかった。

8月23日、熱帯低気圧の影響で発生した豪雨で、地盤沈下が進む嘉義県の沿岸地区は、最も被害を被った。冠水が1週間にわたって続いた東石郷掌潭村では、魚の養殖池の水が溢れて魚が流出した。

◎撮影・黄筱哲　訳・黒川章子

高齢者が守る古い家

熱帯低気圧が引き起こした八二三水災は、嘉義県沿岸の布袋郡と東石郷に最も大きな被害をもたらした。働き盛りの世代が都市部へ流出したこの地区では、高齢者が古くからの家を守っている。今回の豪雨では住宅が浸水し、上の階に避難していた。水が引いた後に入った家の中は、ひどい惨状で、片づける気力も失せ、ただ誰かが助けに来てくれることを願うばかりだった。

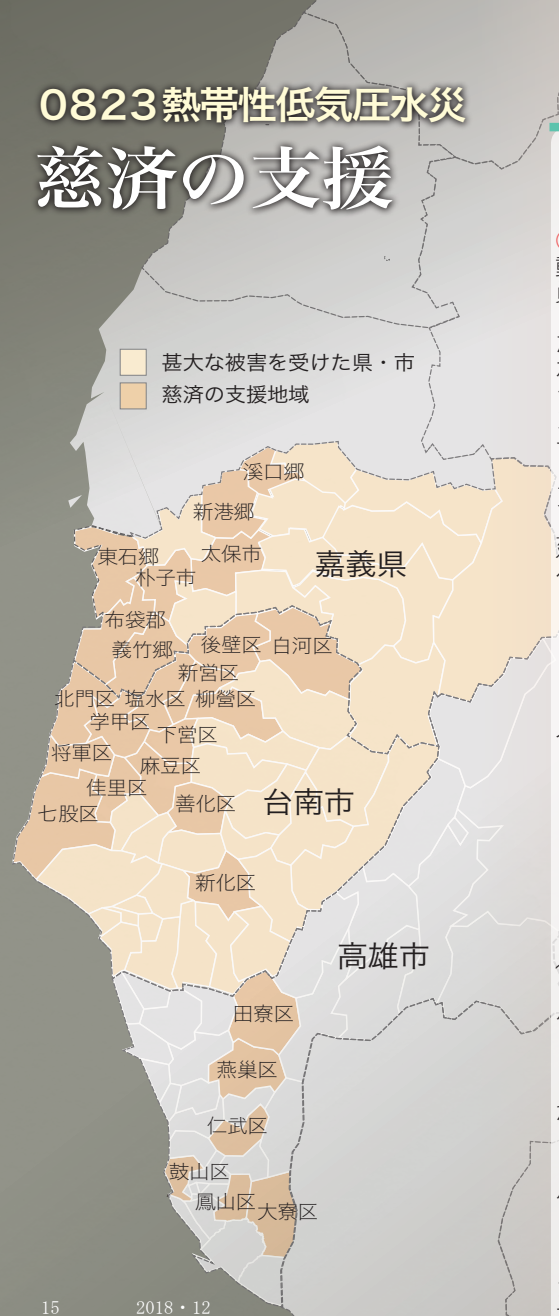
水は恐ろしい

水が引いた後で畑を見に来た女性に話を聞いたところ、心血を注いで耕した場所が泥で埋もれてしまった光景を見て足が停まり、すっかり気を落としてしまったと話した。女性は洪水でだめになった空心菜を手に取り、やるせない気持ちでこう言った。

「私だけではありません。親戚はガチョウと豚を飼っていましたが、すべてだめになりました。今は大雨になると聞いたとたん、気持ちが落ち着かなくなります。水は本当に恐ろしいです」

統計によると、今回の水害で台湾全土の農業、林業、漁業と牧畜業の損害額の合計は七億四千元に上り、中でも嘉義県の四億五千元が一番多い。

0823熱帯性低気圧水災
慈済の支援



被害状況

◎8月23日午後、熱帯低気圧の目が台湾西南部に上陸し、そのまま留まったため、気象局は雲林以南の地域に豪雨警戒警報を発表した。豪雨の範囲は瞬く間に広がり、頻度が増し時間が長くなったため被害が拡大した。熱帯低気圧が2日後に移動すると、雨も収まり始めた。

◎8月26日夜、新しい低気圧が西南から台湾中南部に襲いかかり、1週間豪雨が続いた。被災地の範囲はさらに拡大し、雲林、南投、嘉義、台南、高雄、屏東各県にまで及んだ。折しも大潮の時間に当たり、嘉義、台南両県の沿岸地区が最も被害を被った。郊外では多くの地域で1週間にわたって冠水が続いた。

◎犠牲者7人、行方不明者2人、負傷者148人

◎県・市が開設した避難所への避難者8492人

◎台湾全土で624校の校舎が被害を被り、損害金額は3億3千万元（一元は約三・六円）にも上るといわれる。そのうち高雄市が187校を占め、被害に遭った学校の数は最も多かった。嘉義県では1億1千万元に上り、被害額が最も多かった。

◎この度の豪雨は1959年8月に起こった八七水災の状況に似ている。その後の2009年の台風8号（モラコット台風）の大型豪雨は、台湾史上最大の被害をもたらした。気象局は、これらの豪雨は特別な例としながらも、地球温暖化が進む中、台湾では降雨日が減少している反面、降ると豪雨となり被害が拡大する傾向にあると述べている。

（8月30日までの統計）

支援

◎8月24日より嘉義、台南、高雄各県の被災地で温かい食事の配付を開始。翌日から水の引いた地域で家庭訪問を開始し、支援の内容を検討した。そのほか、被災住宅の清掃に協力した。

◎避難所で衣料と福慧ベッドを提供　◎被災者と救援活動に当たる軍人への無料診療を実施

◎軍へ防刃手袋、踏み抜き防止インソール、パンを寄付　◎被災した学校の清掃活動に協力

統計

◎温かい食事：23768人分　◎パンの支給：3324個

◎物資の配付：福慧ベッド94個、エコ毛布185枚、生活用品セット436個

◎義援金の配付：慰問金と47枚のプリペイドカードを264世帯へ配付

◎家庭訪問：9457世帯　◎清掃支援：43世帯　◎施療を受けた人：延べ1592人

◎動員したボランティア：延べ10306人

（8月23日から9月19日まで）

今回役に立った配付物資

防刃手袋

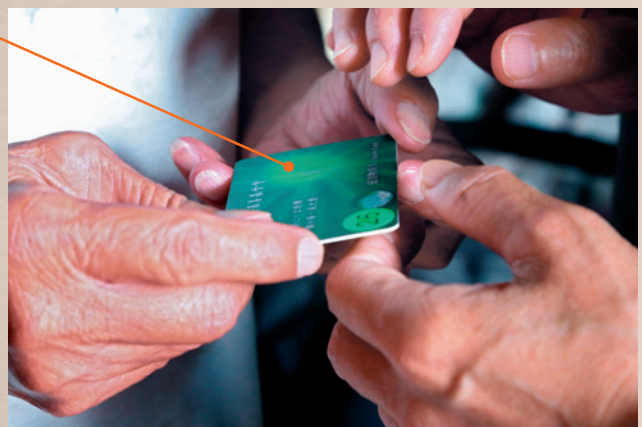
被災地で清掃を行ったり物資を運搬する時に、普通の軍手では手に怪我をしたり、汚水によって感染するなど、衛生上よくないことがある。大愛感恩科技研発公司の材質は防刃・防水で通気性がよく、使いやすい。

踏み抜き防止インソール

釘などを踏んで足を怪我するのを防止するために研究開発された。防臭抗菌作用のある材質を使い、洗えば繰り返し使える。各タイプの靴に装着が可能で、水災の被災地での清掃活動では、雨靴に入れて使った。防刃手袋と共に軍へ寄贈した。

福慧ベッド

被災者の休息・防寒用に開発された折りたたみ式ベッド。荷重は150キロで、椅子にも変形する。慈済の国内外での災害支援で使われている。



慈善プリペイドカード

今回初めて台湾の被災地で配付された。被災者はこのカードで、全聯福利中心で必要な生活用品を購入することができる。ただし、酒とタバコの購入はできない。

地盤沈下とスーパー豪雨に遭遇して

布袋鎮の地盤沈下について、住民は早くから危機感を持っていた。
今回の八二三豪雨では、程度の差こそあれ、二十三全ての里が浸水した。
今回の危機を乗り越えても、
それは今後も危険がないという保証にはならない。
豪雨は地域住民にとって大きな脅威だ。

◎文・葉子豪　撮影・黄筱哲　訳・黒川由希

八月二十八日正午近く、ようやく熱帯低気圧が去った嘉義県を、今度は西南気流によって発生した大雨が襲った。豆粒のように大きな雨が布袋鎮高齢者活動センターのトタン屋根に打ちつけ、太鼓の音のようなバラバラという音が響いていた。車で駆けつけた慈済ボランティアの声も思わず大きくなった。

「里長さん、私たちは浸水地区と浸水していない地区に分け、浸水している地区には全て行きます……」。施哲富は簡潔に東港里の林里長に慈済が「個別安心家庭訪問」を行うことを伝えた。「自分で家を片づけられない一人暮らしの人、社会的弱者、こういう人たちのリストを頂ければ、私たちが片づけを手伝います」

地元を道案内、思いやりを隅々に届ける

八二三熱帯低気圧水害の発生を受けて、故郷を離れていた布袋、東石の若者たちが続々と帰郷し、軍と重機のサポートで復興活動が始まった。慈済地域ボ

●布袋鎮考試里の水が引いたのは、現地でも一番最後だった。慈済ボランティアが訪問した際、現地の里長（左写真、黄色の服の人物）は膝下まで水に浸かりながら被災状況を訴えた。里長の傍の民家はすでに5日以上も浸水していた。

ランティアと嘉義県の大林慈済病院の医療ボランティアチームはすでに家庭訪問、清掃、無料診療を開始していた。

現地ボランティアの施哲富は、積極的に各村長、各里長に連絡して、被災状況を確認する一方、家庭訪問チームとともに隅々まで各世帯を回った。

「乾いた服がありますか?」「うん。まだ制服があるよ」。ボランティアの蔡琬雯が邱さんの被災後の生活状況を尋ねる。四十代後半の邱さんは、二人の心身障碍者の弟と暮らしている。養鶏場で働いて得る賃金で、なんとか一家三人の生活を支えていたが、二十三日の豪雨で三兄弟の住んでいた古い赤レンガの家が浸水したのみならず、邱さんが働く養鶏場も水没してしまった。

多くの鶏が溺死したため、邱さんは自宅と二人の心身障碍者の弟を顧みる時間もなく、経営者の指示に従って鶏の死骸を片づけなければならず、家の大掃除を始めたのは豪雨から数日たった後のことだった。ボランティアが訪問した時、家

●嘉義県沿岸の浸水・冠水地域。養殖池と水田の区別がつかなくなっている。電信柱がなければ道路の所在も判別できない。

●復興支援のため、政府は多くの大型ポンプを被災地に送り、たまった水を溝渠に汲み上げた。道路を通行可能にしてから、泥やごみの除去、清掃を行う。

の中には水に浸かった衣類が山積みになっていた。

「車に服を積んでいるから、持ってきましょうか?」。蔡琬雯は清潔なリサイクル衣類と、まだ温かい菜食弁当二つを渡し、「菜食料理は健康的ですよ!」と付け加えた。

台湾の農村の貧困家庭の苦境はどこも似たようなものである。一人暮らしの高齢者、障碍者、貧しい社会的弱者の収入は乏しく、唯一の頼りは先祖代々受け継ぐ古い家屋である。しかし、家屋は資産とみなされるために、中低所得・低所得世帯の資格を取得することが難しく、政府の補助が受けられないことがままある。

現行法規による規制があるため、政府機関や隣・里各長が、こうした「辺鄙な土地の世帯」に対してできる支援は少ない。一方、慈済は非政府組織であるため、支援できることは多い。「政府が法令に縛られて援助ができないというなら、私たちがその不足を補うのです」。施哲富はこう説明する。

生粋の嘉義人、災害援助に即座に参加

熱帯低気圧豪雨は、布袋、東石という二つの沿岸の郷鎮に甚大な被害を与えた。布袋人の施哲富は災害援助のため走り回った。その実、故郷の人々のために奔走する彼自身も被災者だった。

「自宅は四、五十センチ浸水しました。水が引かなければ片付けや清掃もできませんから、私たち一家はその時間を利用して、災害援助や物資配付活動に加わりました」。四十六歳の施哲富と兄の施哲雄は、提携互助の事業パートナーであるだけでなく、布袋鎮の数少ない慈済現地

●蔡琬雯（写真右）が長期に亘って浸水した家を訪問した。この時にもまだ1センチほど浸水していた。水が引くまで住民は家の片付けもできない。慈済ボランティアは家庭訪問で被災者を労り、今後のサポートを手配した。

●水が引くと、東石郷掌潭村の住民はすぐに家の片付けや掃除を行った。地盤沈下の問題があまり認識されていなかった数十年前に建てられた家屋の多くは、建物の基礎を高くしていない。長年の地盤沈下により、これまで浸水したことのなかった集落が浸水した。

ボランティアでもある。

兄弟はそれぞれの自宅と兄が所有する衣料倉庫の全てが浸水した。倉庫の二、三千着の衣服が水に浸かった。兄弟で話し合い、兄は家の片づけを行い、施哲富はボランティアのユニフォームを着て、災害援助に参加することにした。ボランティア活動の時間は一日十三、四時間にも上ったが、施哲富は「兄の分まで私がやるんです」と話した。

施兄弟が、自宅が浸水し、財産も損害を受けたのに対し、布袋在住の蔡琬雯は今回の水害で幸運にも被害を受けなかった。六十五歳の彼女の自宅は浸水せず、無事だったため、救援を求めているのを知って、災害援助活動に加わり、全力で奉仕した。

「今回の豪雨で、布袋の二十三の里は程度の差こそあれ、全て浸水しました。中でも岑海里の被害が最も深刻で、本当に海に沈んだようでした。八百六十世帯全てが浸水し、高齢者は二階に避難していました」。蔡琬雯は今年六月に布袋鎮役場を退職したばかりだった。退職して三カ月も経たないうちに、かつての同僚から救援を求める電話を受けたのである。

「役場では支援物資が必要だと言っていました。私はすぐに慈済嘉義防災センターに連絡し、慈済ボランティアのユニフォームに着替えて、役場に駆けつけたのです」

嘉義連絡処にある慈済防災連絡センターでは、電話が鳴りやまなかった。ボランティアが緊急出動し、炊き出しや災害援助について話し合った。「モラコット台風の時より降水量が多く、またちょうど満潮に当たったのです」。海辺で育った蔡琬雯は、海水面の上昇について知識があった。たとえモーターポンプを

使っても、短時間で水を引かせることはできない。しかも雨は降りやまず、沿岸地区の中安里、西安里、東安里、貴舎里の四つの大きな里での被害は深刻で、二階の高さまで浸水したところもあった。

八月二十四日朝、蔡琬雯は他の郷鎮から支援に来た慈済ボランティアと合流すると、チームの先頭に立って浸水地区に行き、孤立状態の人々に弁当を届けた。

ボランティアは弁当を運ぶため、ボートを用意した。水の中をボートで進み、通り二本の世帯への弁当を配り終わったところで水の勢いが増したため一旦休止し、一行は布袋鎮役場に戻って救援を待った。この時、軍隊が現地に到着し、部隊の指揮官は救援のため装甲車「雲豹」を派遣した。積載重量は二十トン以上、高さ二メートル以上の特殊車両に乗り、慈済ボランティアはようやく被害の大きい岑海里へ向かうことができた。

「慈済がお弁当を届けに来ましたよ！」。大きなかけ声は、被災地の人々を力づけた。体力のある人は水の中を歩いて来て弁当を受け取り、二階から降りられない人は袋や籠を棒に引っかけて下ろし、弁当を入れてもらった。

浸水被害の深刻な被災地では、車から降りて弁当を届ける作業は多くが男性が受け持った。背の高くない蔡琬雯は、車の中で待機していてもよいのであるが、

しかし彼女は自ら腰まで水に浸かりながら弁当の配付を手伝った。「こんなに浸水している状況を目の当たりにして、心が痛みます。布袋に生まれ育った者として、被災者とともにいたいのです」

長年現地で活動してきた蔡琬雯は、岑海のほとんどの住民と顔見知りであり、だからこそ彼らが苦難にある時には、彼らに寄り添っていたいのだと言う。「地元の人たちは慈済人、とくに顔見知りの慈済人を見ると安心できます」と蔡琬雯は話す。

●軍人が順に並んで東石郷掌潭村の住民の片付けを手伝った。高齢化により若者の不足する現地では、清掃の援助が必要不可欠だった。

地元生まれの地元育ち、故郷沈下の危機

布袋鎮の地元の慈済ボランティアとして、蔡琬雯と施哲富は今回の水害救助活動において、仲介者、案内者の役割を果たした。長年嘉義の沿岸部で生活してきたことで、彼らは現地が直面する難題を他の土地の人よりもよく理解している。

鎮役場で長年兵役関連の業務を担当してきた蔡琬雯は、布袋鎮の若者が都市部へと流出し、高齢化が進む問題を間近で感じてきた。高齢化と並ぶ布袋のもう一つの危機が、地盤沈下である。経済部水利署と国立成功大学の研究によると、嘉義地区で一九九一年から二〇一六年までに六十センチ以上沈下した地区には東石郷、布袋鎮、朴子市、義竹郷がある。中でも沈下の最も主要な中心が海岸から近い東石と布袋である。地元生まれ、地元育ちの施哲富は、この問題を早くから認識していたが、事態が深刻であることを感じたのは十三年前のことだった。

「私の家は東港里の中で海抜の最も高い地域にあります。以前、うちが浸水したら東港里全部が浸水すると言われました。結局、今回の豪雨では東港里の九十五パーセントが浸水したのです」

二〇〇五年、三十四歳の時に彼は勤めていた台糖鹿草畜産場に退職願を出した。しかし退職前、強烈な西南気流により台湾南部に六一二水害が発生、東石畜産場の二千頭以上の豚が水死、豚の死骸の片付けが最後の仕事となった。養豚の仕事を辞めた後、彼は妻と共に兄から衣料品販売を学ぶ一方、慈済ボランティアの見習訓練にも参加した。そしてその年以降、施哲富は地盤沈下や浸水の危機を身近に感じるようになった。

「地盤沈下は以前からありましたが、しかし今では海から四、五キロメートルの内陸部にまで広がっています。私の兄

●水害後、病原菌が蔓延し、公衆衛生の危機を招かないよう、白い防護服を着た軍の化学部隊が浸水地区に消毒薬を散布した。

の倉庫は元々路面より一メートル高かったのですが、今回の豪雨では五十センチの高さまで浸水しました。このことから私はこの土地は一メートル以上沈下したと見積もっています」

二十三日の豪雨の後、東石郷の村の半分は腰の高さまで水に浸かり、布袋鎮では三日目になっても十の里で水が引いていなかった。モラコット台風でも布袋は浸水したが、今回ほどではなかったと施哲富は言う。地盤沈下や浸水に警戒の念があったため、慈済布袋リサイクルセンターを建設する際、彼は基礎を百三十センチまで高くした。これが今回の豪雨で効果を発揮し、リサイクルセンターは百センチの水の上に立ち、救援に来た軍の兵員たちの休息、補給の拠点ともなった。

念入りに設計されたリサイクルセンターは、今回の危機を乗り越えたが、それは決して今後も危険がないと保証することにはならない。「いつ浸水するか分からないと思うと心配ですよ。今ではちょっと大雨が降るだけでビクビクします」

二〇〇五年の六一二水害、二〇〇九年のモラコット台風、そして今年の八二三水害という三度の水害を経験し、施哲富は「安全な地方へ越すことも考えている」と正直に話す。しかし、生まれ育った故郷を捨て去ることは簡単ではない。生粋の布袋人として今を大切にし、自分だけでなく、妻も連れて、人助けを行っている。

「自分の土地は自分で守らなければなりません。外部からこんなにも多くの人がサポートに来てくれたのです。私たち地元住民はもっと頑張らなくてはいけません」。施哲富は力を込めてこう話す。

●

「私たちの四、五カ月の成果が全て水の

●自らも被災者の施哲富（写真中央）は慈済の救助作業を優先し、沿岸の被災地を走り回り、連絡や家庭訪問、撮影などを行った。妻の蔡玲玲（写真左）も一緒に地元の人々をサポートした。

泡となりました……」。豪雨から何日も経って水はようやく引いたが、布袋鎮貴舎里の被災者の許さんは、蔡琬雯に泣きながら豪雨による農作物の被害について訴えた。蔡琬雯と同行して「安心家庭訪問」を行っていた台中の慈済人も、同情とやるせなさの混じった表情で彼女を見つめていた。

「大丈夫ですよ。これからまた立ち上がって、善行を行い、必要な人を助けてあげましょう」。蔡琬雯は許さんが日頃から寄付や人助けなどの善行を行っていることをほめ、慰問金の入った封筒を手渡した。

「本当にもらっていいんですか?」

「いいんです。あなたはお子さんを立派に育てたじゃないですか。みんな感謝していますよ。不運が行くところまで行き着けば、幸運が来ると言います。今日から全てがうまくいくといいですね」

他の県市からきたボランティアを率いて、嘉義沿海の故郷を一戸ずつ家庭訪問し、被災者を慰め、後続援助の必要について理解する過程で、蔡琬雯は證厳法師の思いやりを確かに被災者に伝えた。

広範囲に渡る浸水・冠水被害が、多くの人々の協力により、短期間で平静を取り戻せたことは、現地のボランティアにとってはありがたいことだった。しかし、故郷の気候変動や地盤沈下の進行に対しては、警戒の念を忘れてはならない。

「結局は心の問題です。布袋、東石の地盤沈下は深刻ですが、私たちにできることは、真心を持って、皆が誠実になり、災害を減らしていくことです」。施哲富は実感を込めてこう話す。

（慈済月刊六二三期より）

●泥水を除去した後、慈済ボランティアがパイプをつなぎ、被災した家の壁、床を水で洗い流す準備をしていた。清掃中、割れたガラスなどを踏むこともあるため、ボランティアは雨靴のなかに踏み抜き防止インソールを入れて、足の怪我を防止した。

慈済はなぜ、安心家庭訪問を続けるのか

◎文・范姜惟詠　撮影・黄筱哲　訳・高雪白

慈済は十一日間に九千四百五十七世帯の「安心家庭訪問」を終えた。被災した家庭に祝福を贈り、寄り添う。再調査をして短期、中期、長期に援助の必要な弱者家庭だと判断すれば、以下の後続支援も実施する。

・一人暮らしの高齢者に対する長期ケア
・被災学生に対する就学支援

「すべてはもう過ぎ去ったのです」。慈済が人を感動させるのは、身を以って行動に示すところです。慈済のユニフォームを着たボランティアは、両手で一人暮らしのお年寄りを抱き寄せ、背中を軽くたたいて、無言のまま優しく接すると、

撮影・簡淑絲

●慈済ボランティアは被災した布袋鎮の家を一軒ずつ回って訪問した。被災者の話を聞き取り、證厳法師からの慰問の手紙と見舞の品を手渡し、被災者に法師の温かい心遣いを伝えた。

お年寄りは不安がぬぐい去られたかのように見えました。雨が止み、空は晴れて、お年寄りの心も安らかになっていました。

安心家庭訪問は被災後すぐに行う大事な活動です。素早く被災地に駆けつけるのは、被災者の不安を和らげるためです。そして、證厳法師と全世界の慈済人からの慰問と祝福の気持ちを贈るのです。災難に遭った被災者の家を訪ねて回り、困ったことはないか、ほかに何か必要なことはないか、被災者のニーズを把握するのです。

八月二十三日の水害を例にとると、慈済ボランティアは大雨の中、大至急水害が発生した地域へ弁当と日用品を送って心身を温め、水が去るのを待って被災者の住宅を清掃しました。被災者は、ほとんどの家財が使えなくなり、買いなおすと出費が大きく、子供の登校日も近いので学校の雑費や学用品はどうしようかと悩んでいました。

これらを調査することが安心家庭訪問の目的です。すぐに被災地の情況を把握して、慰問金や慈善物資、日用品購入のプリペイドカードを贈って、急場に役立ててもらいます。被害が甚大な嘉義県東石郷と布袋鎮を訪問した時、二百世帯以上は今後も訪ねる必要がありました。同じく現地を訪れていた嘉義県の慈済台中支部社会服務組の劉慧芳組長が、「被災者の方たちは、『安心家庭訪問に訪れる藍天白雲（青いシャツと白いパンツの慈済の制服）の慈済ボランティアは、安心を持って来てくれた』と言っているのです」と話すように、安心家庭訪問が被災者に安心を贈るということでした。被災者が安心し、心を広く持ち、気が晴れる、と言う意味です。

今回、安心家庭訪問を行った中に、多くのお年寄りがいました。一人暮らしのお年寄りは、長期ケアと結びつけて世話をする必要があります。急速に家の中へと流れ込んでくる水に、物を移動する間もなく、すべては流されてしまいました。その住民の生活が元のように戻るように、ボランティアは中古の家具を探して援助するほかに、地域の人々を集めて平安無事を祈る祈福会を行いました。被災者の恐怖を取りのぞき、慰めるためでした。

安心家庭訪問では、被災者の住宅だけでなく、学校も訪問します。ボランティアは被災地の学校を訪ね、被災して困っている学生の需要に応じて、すぐさま支援をするのです。

今回の急難救助に動員したボランティ

●8月末、被災地の浸水は全て解消した。静思精舎の法師が9月1・2両日、慈済ボランティアを伴って嘉義県の布袋鎮と東石郷村里、さらに台南市塩水、学甲、将軍、新栄を慰問に訪れた。訪問した世帯は合計6000世帯に上った。

アは延べ一万人を超えました。被災地は非常に広く、配付の準備は想像以上に困難を極めました。物資配付と家庭訪問ルートの計画は非常に複雑で、里長や隣長に協力を要請し、支援を必要とする人たちを探さねばなりませんでした。自らも被災した嘉義県の慈済ボランティアの施哲富は、「安心家庭訪問の実施は簡単ではありませんでしたが、皆は短い時間で大規模な思いやりの活動を成し遂げました」と言いました。

台南の慈済ボランティア、黄福全は、「被災地では慈済について誤解をしている里長たちもいましたが、私たちと一緒に訪問してくれたので感謝しています。

彼らは、訪問しているうちに慈済の真心を感じ取り、活動を終えた後には感動して涙を流していました」と話す。

黄福全は、安心家庭訪問をしているうちに、これは苦を見て福を知る旅だと思いました。突然襲いかかってきた災害に、どんなに慌て、驚いただろうか、生活の重心を失った様々な話の中で、一歩踏み出すきっかけをつかむのです。

二〇一四年七月三十一日の深夜、高雄でガス爆発が発生しました。二〇一六年二月には台南で大地震が起こり、二〇一六の七月にはスーパー台風ニパルタックが台東県を襲い、重大な被害をもたらしました。さらには、今年の八月二十三日に水害が発生し、慈済は安心家庭訪問の支援活動を実施して、台湾全国からボランティアが続々と支援に駆けつけました。

命とは呼吸をしている間だけあるものです。いつもと変わらない呼吸で、足取り軽く、安心家庭訪問をしています。しかし、無常や天災が発生した時に、すぐさま安心家庭訪問に行くのは、被災者に「自分は忘れられていない」と安心してもらうためです。ボランティアは自発的に、苦労をいとわず、温かい思いやりを与えているのだといえます。

（慈済月刊六二三期より）

大林慈済病院
災害支援医療から地域の長期介護まで

◎整理・劉軒宇　撮影・黄筱哲　訳・惟明

甚大な水害を被った嘉義県にある大林慈済病院は、地元である被災地で九日間連続で診療支援を行った。地元住民が水害でなくした常用薬を処方するほか、清掃や救済活動の時に負った捻挫や切り傷、肩や腰の痛み、皮膚病などを治療した。

そして引き続き、救済中に見つけた一人暮らしのお年寄りたちの長期介護を手配して、地元住民を守る体制を整えた。

「町内の皆さん、慈済が龍山宮脇の町民会館で無料診察を行います。保険証は要りません。早く集まってください！」と布袋東港町で町内放送が流れた。

七十五歳の邱お婆さんは重い足を引きずって医療ステーションに入って来た。眩暈と目の痛みを訴え、膝あたりまで浸水した自宅のことを思うだけで目が赤くなった。「しばらくは悩みが多くて眩暈が出やすいかもしれませんが、洪水は仕方ないことなので、気を楽にして下さい」と大林慈済病院の林名男副院長はお婆さんの手を取り、優しく話した。

「年寄り一人で暮らしているからねぇ……」。お婆さん

●嘉義県布袋で医師が住民の足を詳細に診察した。大林慈済病院は8月25日から9月2日まで延べ203名の医療スタッフが診療支援活動に参加、延べ816名に奉仕した。

は、家財道具は全部水に浸かり、マットレスが何日経っても乾かないことを考えると、心が晴れないと話した。子供とは同居しておらず、毎日血圧を測って電話で子供にその数値を報告はしているが、その数字の意味をはっきり知らない。

「気を楽にしてください！」。林名男はお婆さんの訴えに耳を傾け、優しく慰めてあげた。

六十六歳の顔さんという女性は、連日長時間水につかって家の整理をしていたのが原因で、十本の指の付け根が黒くなった両手を広げて見せ、軽く触れるだけでも激痛が走ると訴えた。林名男医師は軽く彼女の指を触って詳細に診察した結果、細菌感染していると診断し、塗り薬だけでは治癒できないため、飲み薬を処方することにした。彼女には持病の糖尿病があるため、看護士の洪婷妮は薬を塗りながら、絶対に汚れた水に触れないよう、再三注意を促した。

●慈済ボランティアは被災地の視察と家庭訪問をした時、医療を必要とする人がいたことを知り、医療ステーションに送迎した。

●東石郷掌潭村ではやっと水が引き、大林慈済病院の施療チームが掌潭村保安宮で住民に施療を施した。（撮影・張菊芬）

薬局には薬を調合する時に使う椅子が置かれていたが、薬剤師は一度も座ることはなかった。医師の診察が始まってから、薬剤師の李紀慧は心配してずっと側についていた。体と気持ちの不調という二重の「病状」を抱えたおじいさん、おばあさんを薬局に案内し、椅子に座らせてから、渡した薬の中身と飲み方を丁寧に説明した。お年寄り達が涙を拭き取る姿を見ると、彼女は立ったりしゃがんだりして、付き添いながら背中を撫でてあげた。そしてお年寄りたちの気持ちが落ち着くのを見て、ゆっくり医療ステーションから送り出した。

タイムリーな治療以上に後遺症の予防に努める

二十六日午前、雨が降り止まない中、大林慈済病院の賴寧生院長、簡瑞騰副院長、そして数名の看護師は車一杯の薬品を携えて、嘉義県布袋鎮公民館での無料診療に向かった。

布袋に向かう国道八十二号線の東石道路はまだ冠水していた。皆は「人間ナビ」と呼ばれるケースマネジャーの蔡淑蘭の案内を頼りに、布袋鎮にたどり着いた。蔡淑蘭は布袋生まれだが、生まれて初めて、こんなに多くの軍用車が生まれ故郷を走っているのを見て悲しかった。

布袋鎮役場と向かいの警察署の二階に布袋、義竹、東石からの住民が避難していた。外で暮らしていて、両親と同居していない子供たちは両親がどこに避難したかが分からず、所在を聞き回っていた。町役場に避難していたお年寄りの多くは何日も着替えがなかったので、大林慈済病院は健診センターから着替えを届けた。

二十七日、大半の地域から水は引いたが、嘉義県の沿岸地帯には依然として水に浸かっている村があった。嘉義県衛生局は大林慈済病院、嘉義長庚病院、衛生福利部朴子病院、台中栄民総病院湾橋分院と医師組合、看護師組合を動員して、手分けして六カ所の避難所で、週一回の施療を行っている。大林慈済病院は順次、東石郷と布袋鎮の十八の役場や寺院の集会場で施療を行っている。

周辺地域で安心家庭訪問活動を行っているボランティアは順次、医者にかかれない住民を車で医療ステーションに送ったり、医師による往診を手配した。七十八歳の余お爺さんは清掃中に腕を怪我して出血が止まらなくなったため、ボランティアが大至急、医療ステーションに連れて行き、傷の手当てをしてもらった。待機している車が往復することでお

年寄りたちは早く診察ができた。

家庭医学部の孔睦寰医師によると、災害発生から一週間が経ったが、外来の内容が変わり始めた。常備薬をなくした住民や怪我のほか、ストレスによる高血圧や糖尿病の症状が進行した患者が増えた。医療チームが今後立ち向かう任務は、伝染病やその他の身体的、精神的な問題の予防である。

「診察に来る住民の症状は、浸水した時に慌てて避難する際に受けた外傷や、長い時間水に浸ったために起きた皮膚の爛れや爪垢症のほか、その後の家の清掃による筋肉痛などが加わった」と毎日診察している簡瑞騰副院長が言った。また、医者は診察する時に、傷口が悪化したり熱が出たら、すぐに病院に来るよう注意を促している。

●診察に来る患者の症状は清掃や家具の運搬による筋肉痛、外傷、ストレスで悪化した高血圧や糖尿病の症状のほか、情緒不安定もあり、心理カウンセラーが相談にのった。

医療現場でカウンセリング

沿岸部の村民はお年寄りが多い。とくに一人暮らしで家族や親戚が側にいないお年寄りが、突然災難に遭遇すると、情緒が不安定になりやすい。多くのお年寄りが水に浸かった恐怖から不眠症になったり、将来に対する不安を抱えていた。

「一番大きな悩みは何ですか」

「水が引かないので、家をどうしたらいいのか分からないのです」

九十六歳で、一人暮らしのお婆さんは、洪水のことを思い出すと、悲しくなって涙を流した。「もう大丈夫ですよ。過ぎたことだから」と大林慈済病院人文室の葉璧禎主任がお婆さんを抱きしめながら慰めた。

お年寄りの気分が落ち込んでいるのに気づいた時、ボランティアはただちに彼らを連れて心理カウンセラーと協力して

●今回の無料診療を通して気づいたことは、将来に向けた田舎の一人暮らしの高齢者の傷の手当てや慢性病の管理などの問題である。大林慈済病院はボランティアと一緒に地域社会に関心を寄せ、住民の健康を守ることに力を尽くしてゆく。

カンセリングを行い、軽い会話を交わしたり、お年寄りの話を聞いてあげることで、鬱積した不安が解消されるのを期待した。

九日間の施療で、慈済病院と慈済人医会は嘉義地区の住民延べ八百十六人に医療を施した。大林慈済病院の職員とボランティアが布袋と東石の被災者を訪問し、支援を要する高齢者のデータを整理して、在宅介護士の協力を得ながら長期ケアを行う。（慈済月刊六二三期より）

近所にいる親友

青空環境保全ステーション

水も電気もトイレもなければ、屋根さえもなかった。ボランティアは大地を守るため、暑さや苦労を耐え忍んだ。

◎文・洪淑燕　撮影・張文聰　訳・心愛

「師兄（スーション）、師姐（スージェー）（師兄、師姐は慈済の男性、女性ボランティアの呼称）。皆さん、ちょっと手を休めて朝食をとりましょう。今朝の献立は、蒸焼き饅頭と里芋餅、それに豆乳やコーヒーもありますよ。召し上がってください。休んでからトイレへも行ってらっしゃいね！」。環境保全ボランティア陳栄金隊長と廖秀美組長は丁寧に呼びかけていた。ところが、いくら声をかけても皆は自分の居場所を離れようとしなかった。

「一度立ち上がってお水や食事をとると、また戻らなければなりません。そしてしばらくするとまたトイレに行きたく

なるので、このように往復すれば二十分間を費やしてしまい、仕事するのに時間がもったいないわ！　むしろ、分別の作業を早めに済ませてから水分補給した方がいいのではないですか？　なにしろここに朝日が差し込むと、暑くて仕事ができなくなりますから」と、動きが少々鈍くなったお婆ちゃんがつぶやく。

三無し一欠け

「三無一没有（三無し一欠け）」というのは、水なし、電気なし、トイレなし、さらには屋根さえもなかった環境保全ステーションのことである。そのような悪条件が彰化芬園郷社口環境保全ステーションの特徴と言えよう。ボランティアは夏の炎天下の元で作業を行っていても、皆は清らかな心で、清々しく感じている。冬は、厚手のコートを身にまとっても震えるほど強力な寒気にさらされても、ボランティアの情熱的な心は太陽のように温かで天気に左右されることがないのだ。

環境保全ステーションの空地は、心ある方が無償で貸してくれたものである。ボランティアたちは、限られた貴重な空間を有効に利用していた。空地に

は廃棄されたコンテナーがあり、そこに回収した古着などを収めていた。プラスチックや紙類や缶類などを地面に鉄板で仕切って分別した。鉄板の高さが人より高いので、小柄な師姐はもちろんのこと、師兄でも力を込めないと籠に分別済みの回収物を入れることができなかった。

環境保全ステーションは場所が狭いだけでなく、電気のないことがもっとも大きな試練であった。電気がなければ給水もできない。皆が手を洗うため師兄が他所から運んできたきれいな水を小さなタンクに入れて対応していた。幸い、ステーションより五、六十メートル先に一軒の漢方薬の店があり、店のトイレを借りることができた。たとえ店内が客でいっぱいであっても、ボランティアが出入りして、異臭が漂ったり、汚れた靴の足跡が残されたりしても、店主は嫌な顔を見せず、皆が用を足すため快く使わせてくれていた。

朝の五時を少し回ったころ、静まりかえった環境保全ステーションには小さな街灯がともっていた。近所の人はまだ起きていないので、早めにやって来た年輩のボランティアたちは、忍び足で作業をし、できるだけ音をたてないように分類をしていた。ところが、日が昇ってくると、皆はまるで太陽とかけっこをするかのように、さらにスピードアップしなければならない。幸運にも傍に一棟三階建ての建物があり、その建物の陰のおかげで少々日差しを遮ることができた。

このような環境で作業をするため、皆が大量の回収物をごく短時間のうちに手早く、しかも正確に分別作業をし終えることができるのは、日ごろからの訓練の賜物だと思った。

旧正月三日目の約束

環境保全ステーションでは、毎週月曜日と木曜日が小規模回収日で、毎月二週目の日曜日が大規模回収日となっている。また、その空地は月曜日の夜になると夜市に様変わりし、さまざまな屋台が並ぶ。彼らの商売に影響しないよう、回収物の整理分別をその日のうちに済ませなければならない。

回収の日になると、ボランティアたちは早朝から蟻の軍団のようにせっせと作業を行い、手早く分別整理を終えてから地面をきれいに清掃する。それから、侯麗珠師姐が運転する回収トラックがゆっくりバックしながらステーションに入ってくる。そのトラックに載せてあるのは

回収物ではなく、皆の体力を補うため師姐が家で調理した料理と薬膳スープである。料理の匂いが辺りに漂い、皆の食欲をそそる。

トラックのボディーが食事のテーブルに変身した。皆は整然と列をつくり、手を合わせて仏に供養してから順番に食べ物を取り、思い思いの所に腰を下ろして食べていた。不平不満はなく、「美味しかった。お腹いっぱいになったわ！」という称賛の声だけがあがった。仕事につ

●心ある人が空地を環境保全活動の場として貸してくれた。回収トラックが回収物を載せて何度も出入りし、短時間の間に回収した全ての物資を分別している。

いても、皆は奉仕の苦労を語らず、ただ「こんなに速く片付けられるなんて、私たちはすごいでしょう！」「今日は早めに来て自分の仕事ができて良かったわ！」と自分の仕事ぶりを満足する。

ボランティアたちのおやつと昼食については、調理できる師姐たちが順番に準備しているようだ。お家で調理してステーションまで運ぶから、当番の人は、皆に熱々を美味しく食べさせるため、調理時間をうまく調整しなければならない。

時には朝から雨の日もあった。作業をいくら止めさせようとしても、ボランティアは回収の決意がかたく、レインコート姿で作業を続けた。時々、「せっかく来たのだから仕事をしないと、もったいないわ！　それに、ここで人とおしゃべりをしながら分類整理をすると運動にもなるのです。まして、今日のうちに済ませておかないと明日にはもっと量が増えてくるでしょう」と言う年輩のボランティアたちの言葉には感動せずにはいられない。

また、旧正月三日目には毎年恒例の集まりがある。たいていの人はまだお正月気分だったが、ボランティアは自分の知り合いや隣近所の人を誘って社口環境保全ステーションに集まり、そこで王有信

師兄は慈済歌曲を流しながら、皆は楽しく気持ちよく分別をしていた。道路にあふれていたほど大量にあった回収物の整理分別が、わずか三、四時間後の午前十一時前には全て済まされた。

その環境保全活動には、毎年延べ六、七十人が参加した。「たとえ三十分や一時間だけでも、自分が新年早々地球を守るチャンスを逃したくない」と思っているのだろう。

我々は家族

環境保全ステーションの皆は、一つの家族のようにお互いに関心を寄せ合っていた。誰か来ていない人がいれば、組長は必ずどうしたか尋ね、もし組長が気づかなければ、誰かが組長に報告する。欠席の理由を了解したうえ、まずは電話で無事かどうかを確認し、必要な場合には自宅を訪ねる。

陳栄金隊長は、「時々ボランティアのメンバーから私に、『しばらく来てない人がいるみたいよ。訪ねてみませんか』と言ってくることがあります。ここ三カ月の間、二人の常連ボランティアが二回だけ休みました。ところが、その一人を訪ねに行ったら、既に亡くなっていたことが分かりました。『人生は無常』とは言え、もっと関心を寄せていれば、そのような残念なことは起きなかったでしょう」と遺憾の意を表した。

「環境保全ステーションの基盤をしっかりと築いてくれた先輩の師兄、師姐に感謝すべきです。環境保全のために力を尽くしただけでなく、ボランティアの輪も広めてくれました。ボランティアは、回収作業にどんな困難があってもどうにかやり遂げますが、むしろ心配なのは、働く機会を逃すのでは、ということかもしれません」と陳栄金隊長はボランティアたちへの感謝の気持ちを語った。

ボランティアの陳秋燕は、「社口環境保全ステーションの年配者がもつ不撓不屈の精神を私たちは見習うべきです」と話す。かつてある年配ボランティアに、「手元の仕事が終わらないと席を立たないのはなぜでしょうか?」と彼女が聞くと、「膝がよくないので立ったり座ったりするのは面倒くさいです。終えるまで一気に続けた方がいいですよ!」と明快に答えた。

ある年配のボランティアは、早朝バスで来て、回収を終えたら歩いて帰るようにしていた。その理由は、歩いて来ると時間がかかって回収の作業がなくなるの

●回収トラックのボディーが料理を載せたテーブルに変身。皆は整然と列に並び、手を合わせて供養の歌を唱える。

が心配だから、バスで早めに着くようにしているのだ。一方、作業を終えたらステーションで食事を頂いてお腹いっぱいになるので、食事の支度を急ぐ必要もなく、ゆっくり散歩しながら家路に着くのだという。

「環境保全ステーションは団結心が強く、互いに固く結び合っています。回収日になると、皆は心を一つにして協力し合い、作業が全部終わってから一緒に『下校』するようにしています。しかも、雨の日も風の日も、常に全員集合なので本当に偉いです」

ボランティアたちは、汗でびっしょりになっても、または、雨の日にレインコートの下に来た服まで濡れても、なお作業の手袋を脱ごうとしない。陳栄金隊長と廖秀美組長は、心を痛めながらも感動していた。「近い将来に、屋根がついていて、電気や水があり、台所とトイレもあって、それに皆が勉強できるような設備を整えた環境保全ステーションになるように」と心の中で願をかけた。皆さんもその念願がかなうように一緒に祈願してほしいと思う。

（慈済月刊六二〇期より）

芬園郷社口慈済環境保全ステーション

√社口村芬草路二段

√毎週月曜日、木曜日は回収日

√毎月二週目の日曜日は大型回収日

慈済國際災害支援 ラオス

洪水の後

ダム決壊事故を支援して

二〇一八年七月二十三日、ラオス南部アッタプー県サナームサイ郡で水力発電所のダムが決壊する事故が起きた。大量の水は瞬時に流れ落ちて四方に広がり、下流域の村落や農地が重大な被害を蒙った。六千人近い人が住居を追われ、避難した。

事故から一カ月余り、八月三十日に上空から見た状況では、部分的にまだ水が引いていなかった。

文・朱英彦　撮影・蕭耀華　訳・済運

田舎の小道

ダム決壊事故から1カ月以上が経ったが、サナームサイの被災地の農村の小道はまだ至る所が泥水に覆われていた。村人は出入りする時も困難を極め、耕運機を足代わりにしていた。

空中補給

事故発生後、数千人の住民は数カ所に分かれて避難していた。一部の人は被災地の近くにある小高い山に仮住まいしている。山間から外部に通じる道は洪水で寸断され、生活物資は軍のヘリコプターによる空からの補給に頼るしかない。２０１８年８月３０日、慈済ボランティアは山間部の住民を緊急支援するため、軍のヘリコプターで即席飯を届けてもらった。

●降りしきる大雨の中、慈済ボランティアはサナームサイ郡にある4つの避難所を慰問し、被災者たちの生活に関心を寄せた。

八月末のサナームサイ郡は天気がよく変わり、黄土のぬかるみの中にテントが何列にも並んでいた。そこはサナームサイ中学校で、四つの村の住民約三百人が避難していた。雨が降る中、ボランティアは運動場傍にあるテント区域と教室を訪ねて回った。一カ月以上も家族と一緒に学校で避難生活を送っている村民のラーは、ボランティアに笑顔で感謝した。五十八歳のラーはずっと農業に従事してきたが、洪水であらゆる財産を水に流され、わずか数枚の衣類を持って学校で避難生活を送っている。

「泣きたいですよ！　目の前で苦労して築き上げた財産がなくなってしまったのですから」と彼女は言った。

純朴な村人は一文無しになっても笑顔を忘れない。慈済ボランティアの羅美珠は忍びなく思って抱擁した。お互いに言葉は通じなくても、ボディーランゲージで十分に分かり合うことができた。

「七月二十三日の夜、アッタプー県の完成間近のダムが連日の豪雨で決壊し、洪水が怒号のように流れ落ちて十三の村落をのみ込み、六千人以上が家を追われました。突然襲ってきた洪水で恐れおののいた住民のことを思うと、忍びない気持ちです」。九月二日の朝、サナームサイ郡政府の避難所で被災者たちは、一心にボランティアがラオス語を使って読み上げる台湾の證厳法師からの祝福のメッセージに耳を傾けていた。ぬかるみにテントを張った生活をして一カ月余り、慈済の福慧ベッドと毛布が届き、

やっと困難な生活環境が改善されようとしている。

豪雨の夜、家がなくなった

シナイ半島のラオス、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムを流れるメコン川沿いには数千万人が生活している。下流域のラオスは豊富な水資源を利用し、建設中のものも含めると約百カ所の水力発電所があるため、「東南アジアの電池」と呼ばれている。全国で発電する三分の二の電力が輸出されている。二〇一七年、ラオス北部で小規模なダム決壊事故が発生したことがあるが、今年七月二十三日には南部のサナームサイ郡で水力発電ダムが豪雨の夜に決壊し、洪水が瞬く間に下流の村落を襲った。被災地域には河川による排水システムがなく、一部の地区は水が引いた後、大量の泥が残り、救済人員が入るのも困難な状態だった。

前代未聞の大災害で、十以上の村落の住民がサナームサイ郡庁舎近くにある三つの学校に設置された臨時の避難所で暮らしている。農地も家も損壊し、住民は一世帯に一つのテントを割り当てられているだけで、後は数枚の板で簡易調理場を作り、寄付された米で三食を維持している状態である。水を貯めたい時はビニールの両端を結ぶと、最高の貯水槽に早変わりした。

八月中旬、ラオスに隣接したタイの慈済ボランティアは被害の視察に出かけると共に、即席飯と携帯用食器などの物資を現地の華僑の支援の下に送り届けた。その辺りは五月から十月までが雨季であり、今年の豪雨はとくに激しく、山間部の被災地区では道路が寸断され、救済の困難さに拍車をかけている。

●避難所のテント区域で慈済ボランティアはじっくり被災者の苦しみに耳を傾け、お互いに抱擁して祝福し合った。

タイと台湾の災害支援チームは国境を越えて大量の物資を被災地に送る最も早いルートを見つけようと努力した。八月下旬、福慧ベッドと毛布、即席飯をサナームサイ郡の被災地に届け、三十日、県政府の協力の下に、一・二トンの即席飯と三千個の携帯用食器が軍のヘリコプターで山間部の被災地区に届けられ、住民の基本的な生活が保たれた。

即席飯が村人のお腹を満たす

「山の上の住民は下りて来られず、食糧が足りないようです。即席飯の炊き方を教えましょう」。国際災害支援経験が豊富な台湾のボランティア、羅美珠は大きな鍋と灼、ガスコンロを購入し、郡政府の避難所に慈済の炊き出し所を設け、山間部の三つの村からのボランティアに、山に戻ってから村人に教えるための即席飯の簡単な炊き方を指導した。

村人のワンディサワンは一心に通訳の言葉を聞いて、ラオスと台湾の生活の違いを感じた。羅美珠はゆっくりした口調

●洪水の後、とくに食糧と飲料水などの物資が欠乏した。慈済ボランティアは被災地のパタワン村に浄水設備を設置し、飲料用水を提供した。写真は村民が空のポリ容器を持って浄水場に向かっているところ。

●水利署と工業研究院が共同開発した浄水設備は手提げで被災地に持ち込める上、長時間、飲料用水を提供することができる。慈済ボランティアは初期の支援を終えた後、浄水設備を住民に残すと共に操作方法を教えて飲料水の問題を解決した。

慈済の支援　ラオスダム決壊事故

● ラオスは東南アジアの中で唯一海に面していない内陸部に位置する国である。7月23日、南部のアッタプー県でダムの決壊事故が発生した。洪水で下流域の村落が被災し、6千人近い住民が避難を余儀なくされた。慈済ボランティアは8月中旬、視察チームを派遣し、物資の輸送、集荷などの準備をした。福慧ベッド1151床、毛布2315枚、即席飯1・2トン、浄水設備、医療器材が送られた。ラオスは慈済が慈善活動を行った96番目の国・地域となった。

で調理の流れを説明すると共に、五キロ詰めの袋は回収できることを教えた。

便利で素早く調理できる即席飯は美味しいだけではない。その香りに誘われた近くの駐屯地の軍人たちがボランティアに参加した。五キロの即席飯はちょうど郡政府職員七十人分の昼食になる。メディアがそれほどそれが歓迎されているのを見て尋ねた。「一・二トンの即席飯と携帯用食器の金額は合わせていくらするのですか?」「愛に値はつけられません」とボランティアの彭秋玉が答えた。

福慧ベッドがあれば、テントでもよく眠れる

被災者は郡政府近くのサナームサイ中学校と小学校、幼稚園の三カ所に避難していた。臨時のテント区域は雨でぬかるんでいたが、学期が始まる前に教室を元に戻す必要があったため、数多くの住民は空き地に移るしかなかった。二日間の訪問で、住民のニーズと交通手段の不足を知った後、ボランティアは福慧ベッド

●避難所のテント区域は雨でぬかるんでいた。慈済ボランティアは492世帯、2000人以上の被災者に毛布と福慧ベッドを配付して、被災後に直面している被災者の困窮を和らげた。

●被災した村人はエコ毛布を受け取った後、嬉しそうに頭に載せて帰って行った。

かぶらせて言った。「今回ラオスに来たのは被災者を支援するためです。自分の手で買い物券を配ることができてとても感激しています」

支援活動で相談の手伝いと輸送を担当した現地実業家の林耀文、陳正華、陳正輝たちは努力して準備してきた成果が見えたことに喜びを感じると共に、彼らもボランティアとして自らの手で毛布を住民に手渡した。また、慈済が感染症を見つけ出す医療機器類と医薬品を寄付し、アッタプー県婦女の会の会長と国防省の代表が受け取った。

配付活動で人と人の間の美しい愛と善が見られた。今回は配付物資の量が多かったため、ボランテイアは若者や中年世代の村人に、人々が受け取った福慧ベッドの運搬を依頼した。「彼らは本来なら自分たちが物資を受け取る順番なのですが、ボランティアの人数が足りないため、先に彼らに手伝ってもらい、他の人が受け取り終えた後に取りに来てもらっているのです」。タイのボランティア、張惠珍は彼らが自分のことを後回しにして他の人を手伝っていたことに感謝した。

配付活動が無事に終わった後、住民は福慧ベッドを使い始めた。ボランティアは一つずつ見て回り、しっかり組み立てられているかどうか確かめた。

ボランティアがテント区域に行くと、皆、福慧ベッドを木の下に置いて涼んでいたので、話の輪に入った。そして、テントの中では、子供たちが毛布を敷いた福慧ベッドの上に気持ち良さそうに寝転がっていた。夜になれば、一家共々ぐっすりと気持ちよく眠ることができそうだ。

浄水場があれば、安心して水が飲める

被災地では飲料水は重要な物資の一つである。郡政府の避難所から十二キロ離れたバーンタワン村は水の引くのが非常に遅く、外部と通じる道は通行が困難な状態だったため、耕運機を使って物資を運搬していたが、とくに清潔な飲料水が不足していた。

慈済ボランティアは終日、電力の供給があるバーンタワン村公民館に台湾水利署と工業研究院が開発した二台の浄水設備を設置した。電気があれば、次は水源から貯水タンクに水を引けばよい。二度の調査を経て、浄水設備を被災地のバーンタワン村に設置し、散らばって住んでいる村人に飲料水を提供できるようになった。

浄水設備ができたと聞いて、村人は次々にポリタンクを持って並んだ。八月二十八日から九月一日までに、浄水場は三トン以上の飲料用水を供給した。住民に安心して飲んでもらうと共に、大量の使い捨てペットボトルを出さなくて済むのである。

「水の味は甘くて美味しく、とてもきれいです」。村には地下水が湧き出るが、誰も飲もうとせず、村人は浄水器から出る飲料水を称賛した。浄水設備の水は甘く、沸騰させる必要もなく、直接飲める。

ボランティアがラオスを離れる前、村長は残して行く浄水設備の操作方法を習得するよう四人の現地ボランティアに要請した。浄水設備の操作は簡単で、濁った水しか出ない地域で長期的に使用することができる。「私たちはまた来ます。その時はまだ誰かが村人のために設備を操作しているように望んでいます」と柳宗言が村長に言った。「ええ、大丈夫ですよ！」と村長が答えた。

●3つの学校にテント区域があり、慈済ボランティアは住民が福慧ベッドを運ぶのを手伝った。住民は道すがら談笑しながら帰って行った。

●組み立てられた福慧ベッドに子供が座り、小さな顔に心地よさそうな表情を浮かべていた。

「水がないと生活に大きな影響が出ます。研究開発された科学技術は人々が最も必要としている時に使われ、緊急時に提供できるべきであり、それがすなわち、最も大きな慈悲なのです」

●

ダムの決壊による被災者は短期間のうちには家に帰ることはできない。真っ青な空の下、純朴な村人は現実を受け入れながらも、時には悲しみを抑えられなくなる。雨季が過ぎた後、住民は政府が計画している簡易家屋の建設に期待している。ボランティアは祝福すると共に、善の循環によって現地で愛の種子が芽を出し、一日も早く村人に平和な生活が戻ることを祈った。（慈済月刊六二三期より）

一念は一粒の種子

◎文・釋徳仉／訳・済運

一念は一粒の種子：正念は良縁を結び、良い果報をもたらすと共に無量の善の種子を作り出す。

目出度い月に感謝の心を持つ

韓国第二十二回万海大賞の授与式典が韓国江原道で行われ、上人が今年の「万海平和賞」の受賞者に選ばれた。万海平和大賞は韓国の「小ノーベル賞」と称され、毎年、全世界から良い影響力を持つ人物を選出している。

上人はボランティア朝会でその賞を獲得したことに触れ、感謝と慚愧が入り混じった気持ちだと言った。そして、その賞は個人ではなく、全世界の慈済人が共に獲得した栄誉であり、韓国の慈済に対する愛護と励ましであると語った。

上人は慈済人と共に、「国際的な賞を獲得したことは慈済がこの半世紀、歩んできた方向が正しかったことを意味しています。誰もが無私の大愛を着実に台湾から世界に広め、平和な世の中と平穏な社会だけを望んでいるのです。従って、もっと努力して道を切り開き、誰もがその大道を歩めるように歩みやすいものにしなければなりません」と激励した。

「感謝すべきことも、また、苦難も多いのですが、誰もが自分を戒

めて敬虔になるよう呼びかけなければなりません。旧暦七月は『めでたい親孝行の月』であり、大衆の修行に成果が現れたことを見て取った仏陀が喜んだめでたい吉祥月なのです。また、大衆が自分の人生を振り返り、両親や先輩の養育に対する恩に感謝する孝行の月でもあります。そして、もっと感謝すべきは、大自然がもたらした資源と人々のさまざまな努力によって、私たちは何不足ない生活ができることです。真心から感謝するのであれば、その生命を善用し、世の衆生のために奉仕すべきです」と上人が言った。

吉祥月の迷信を打ち破る

基金会の各主任が志業事務を報告した時、上人は台湾全土で慈済ボランティアが八百十回の七月吉祥親孝行祝福会を行っていることに触れ、人々の迷信を打ち破り、正信と正念を持つよう呼びかけることに期待した。

「旧暦七月の普度の機会に、大衆に斎戒して菜食することで慈悲心を啓発し、殺生を止めて生命を大切にすることを呼びかけるのです。これは一年に一度行うのではなく、毎日、常に正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を持たなければいけません」と上人が言った。

上人によれば、心に現れた一念が一粒の種子である。その念が正であれば、それは良い種子であり、各方面から良縁が集まって良い果報をもたらすことができ、さらに無数の良い種子を作り出してくれるのである。

また上人は、「仏法教育を受けることとは、仏法を聞き入れ、思考し、行動することであり、現代の世にあったように説法と伝法、実践す

ることが大事なのです。毎年催される旧暦七月の祝福会が演劇という方便法を使って衆生を仏門に招き入れるにしても、現実的な事象と関連づけ、『衆生を普度する』意義を人々に理解してもらうのです。細心に方法を考え、大衆を一歩ずつ仏法を理解するよう導くことが大切で、活動に参加してもらうだけで、その後、何もしないのはいけません」と言った。

「大型の経典劇に参加した人の数は非常に多く、皆、『感動した』と言っています。一時の感動は水面に一滴の水が落ちてさざ波が広がるようなもので、すぐに静かになってしまいます。大切なのは、欲と共に追求する一切の事柄が夢や幻の泡のように一時的な虚像でしかなく、瞬時に消えてなくなり、無常そのものだということを知ってもらうのです。誰もが無常と真理を見てもらい、欲に釣られて業を作らないようにさせることなのです」

「各地で吉祥月祝福会を催していますが、それは行事だけのために催したり、人々がにぎやかなお祭りを見に来るような気持ちで参加して、環境を汚染するようなことがあってはいけません。細心の計画を立てて大衆を導き、菜食が心と体、そして地球の環境保全になることを理解してもらうのです。誰もが清らかな心身で参加し、生活に密着した仏法に出会い、清らかで無垢な大愛を啓発して初めて、祝福会を催した目的が達成されるのです」

また、上人は参加した各志業の幹部たちに、「心の大地は自分で耕さなくてはならず、もし、荒れたまま放置すれば、他人には道理ばかり話して自分は実践しなくなります。それでは慧命はもはや成長せず、人を導くこともできません。誰もが縁を無駄にせず、心して精進することを願っています」と開示した。

（慈済月刊六二三期より）

【證厳法師のお諭し】

苦が去った後の説法は永久に役に立つ

◎訳・慈願　絵・林錦濤

群衆の中で奉仕し、苦難の人に幸せをもたらす。
有形の物質は、一時的に落ち着いた生活を与えるが、
無形の法は、慈悲の心を啓発し、安楽自在にさせる。
今生で役に立つだけでなく、
来世からさらに先にまで影響を与えることができる。

九月二十八日の午後、インドネシアのスラウェシ島に強い地震が発生し、予告のない状態で津波が押し寄せて地上を覆いました。建物はひどく損壊し、二千百人の犠牲者と一万人余りの負傷者を出しました。何日も飛行場の滑走路が使えず、軍用機や小型機により辛うじて支援と負傷者の輸送を行いました。

ジャカルタから南スラウェシ州の州都マカッサル市まで飛行機で二時間かかり、さらにマカッサル市から被害が

甚大な被災地の中部スラウェシ州のパル市まで一時間以上かかります。しかし、慈済人はただちに被災地まで行き着くことができなくても、支援活動が中断することはなく、まず、マカッサル市に行って、被災地から送られてきた負傷者を見舞って慰問金を届けました。

被災地では多くの被災者が未だに水や食糧を待ち望んでいることを思い、慈済人はあらゆる方法を使って、台湾やジャカルタからリレー式で支援物資を輸送しました。交通が復旧すると、ボランティアと慈済人医会（慈済の医療ボランティアチーム）のメンバーはただちにパル市に入って支援と施療に行い、即席飯などの物資で被災者の生活と心を落ち着かせると共に、その後の住居の建設支援に関する調査をしました。

慈済は五十三年目に入り、慈済人は世界中で慈済精神を伝承し、これを信じて実行しています。慈済インドネシア支部は今年、二十五周年を迎えました。このイスラム教を主体にした国でも、慈済精神は社会の各階層で受け入れられています。ひとたび災害が発生すれば、必ず支援に駆けつけるボランティアたちの愛は誰に対しても平等で、相手の信仰を尊重しています。

近年、ジャカルタ西のパドマンガン村の貧困者住宅を支援建設した時、初めは仏教団体が自分たちに改宗を迫るのではないかと疑われたこともありました。しかし、ボランティアたちが時間をかけ、様々な方法で忍耐強く、慈済の見返りを求めない理念を説明した結果、ついに真心は受け入れられました。

貧困支援は三百世帯以上の住宅だけでなく、モスクや教室を建てて村人がコーランを唱える場所を作りました。堅固な家に住めるようになった人たちは、四、五千本の竹筒貯金箱を持ち帰り、老若男女が喜んで布施をしています。なぜなら、善行は正しく良い宗教が共に目指しているものであることを彼らは知っており、コーランも同じように教えているからです。

慈済人の中には多くの実業家がいます。お金持ちが貧困者のために家を建てるのではなく、彼らも小額のお金を重視して、「竹筒歳月」運動を広め、それらを結集して真心の浄財で建てたのです。ボランティアはその経過を皆に話して人々を感動させました。これが真の愛の妙法です。

インドネシア支部副執行長の郭再源が皆に話しました。「朝の開示を受けて、

苦集滅道を深く理解していたため、奉仕する時に貧苦の人に出会えば、その人たちを善法から入るよう導くのです。その時に、大衆に実践させようと、師匠が早くから《法華経》で道を切り開いてきた苦労が分かりました。ここ数年来の実践を振り返ると、経文は正に歩いてきた道、すなわち菩薩道であり、無私の大愛だったのです」

スラウェシ島の地震で、三十五国・地域で慈済ボランティアが愛の募金活動をして災害支援を行いました。ハイチやアフリカ諸国など、現地のボランティア自身も貧しいのですが、遅れを取りません。そして、エクアドル地震の被災地の神父と修道女も、慈済の人助けのために募金箱を抱えてやって来ました。国や民族の分け隔てなく、宗教が一つに融合し、一緒に善行することができるのです。

皆で「竹筒歳月」の精神を発揮し、普段から愛の心で以て硬貨を貯めていくのです。衆生に苦難が発生した時は、すかさずこの硬貨を差し出します。また、子供たちはゼリーを作り、お年寄りは草餅を作ってチャリティーバザーに参加しました。材料は自分のお金で購入し、人々に愛で以って一緒に善行しようと呼びかけました。慈善、医療、教育、人文志業体の職員も迅速に行動を起こし、この善意の義挙に参加しました。静思精舎の修行者も我先にと善行に参加し、毎月千元の収入しかなくても、それを喜捨しています。

愛の募金には二重の意義があります。一つは、金銭を重視するのではなく、世の人々の愛を啓発することです。二つ目は人々の警戒心を促し、平穏な生活の中で危機感を持ち、敬虔に自分を戒めることです。

このような境地をかりて大衆に人生の無常を呼びかけています。異常気象と四大元素の不調によって、どの国も災害の苦しみを感じており、瞬時にして人命や財産が損なわれ、この世はなんとも脆弱なものになっています。

平穏を大切にすべきです。平穏とはすなわち幸福であることです。人の苦しみを見て己の幸せを知れば、もっと福を作らなければなりません。時間を無駄にせず、災害や苦難に遭った人々を支援することは、誰もができることです。日頃の消費を少なくすれば、愛の奉仕が実践できます。敬虔に祈り、善念を結集することは、保護膜で天地を平安に保護するようなものです。

布施救済するだけでなく
善の種子を撒き
愛の心を啓発し
人々と福を分かち合うべき。
善意の心で常に足ることを知れば
喜びに満ちる。

今年の七月から八月にかけて、ミャンマー中南部は豪雨が続いたため、三度も水害が発生しました。この一、二カ月の間、田畑は水に浸かり、農作物に大きな被害が出ました。農民はもともと貧しく、天を仰いでため息をつくしかありません。

水が引くのを待って、慈済ボランティアは三つの州へ実地調査に行きました。荒れ果てた農地を目にし、農家が借金で困窮していることを聞き、「これからどうしますか?」と聞きました。「まだビスケットがあります」「なくなったら?」「水を飲むしかありません」と老夫婦がため息をつきました。他人からの助けは望んでいないようでした。皆が貧しく、人々は自分のことだけでも精いっぱいで、他人を助ける余裕はありません。

ボランティアが彼らの高床式の家に上がってみると、長い間大雨で濡れたままになっていた壁や屋根は用をなさず、ボランティアは床を踏み外して下に落ちるのではないかと思いました。

ある家の訪問を終えて、帰ろうとした時、その家のおばあさんはボランティアの手をかたく握ってさすりました。「こんな体格の良い人を見たことがないし、がっしりした手を触ったこともありません」と言いました。この地方の人たちは皆が痩せていたのです。村人は、都市部や海外から来た慈済ボランティアが優しく労り、彼らの話に耳を傾けてくれるだけで満足していました。

十年前をふり返ると、サイクロン・ナルギスが災害を引き起こした時に、ミャンマーに来て災害支援を行った時のことが思い出されました。農民は一生苦労し、一家を支えるのも大変です。借金して種もみを買い、その高額な利息のために、年中働き続けても生計を立てることができません。貧困と借金の中で一年また一年と過ごしているのです。

慈済は被災した農民たちが自立できるように種もみを贈りました。ボランティアが種もみの袋に印刷した、ミャンマー語に訳された「静思語」を見て、農民たちはとても喜び、種もみを使った後も袋を大切にしまっていました。

慈済ボランティアは今回の訪問調査で、かつて支援した村も訪ねました。被害はなかったのですが、村人たちは

ボランティアを見てとても喜び、大事にしまっておいた袋を見せて、「これはとても貴重な袋ですから、大事に取っておいたのです」と口々に言いました。「以前もらった袋には『口で良い言葉、心に良い思い、体で良い行いを』と書かれてありました。「私の袋に書かれてあったのは『感謝、尊重、愛』です」。それぞれ異なっていましたが、皆、その簡単な静思語の一句一句がどのように自分たちの人や物事への接し方に影響したかを話し合っていました。

当時、種もみをもらった後、彼らは努力して耕しました。自分だけでなく、村中の生活を安定させ、幸福を分かち合おう、と種もみを慈済に持って行って、他の貧しい人を助けてほしいと頼みました。ウテントン、ウサントン兄弟は感動して慈済ボランティアになりました。

彼らは指導の下に、今では十八の村で九百六十世帯以上が慈済の竹筒歳月にならって、毎食米を洗う時に一握りの米を櫃に入れ、米貯金して、毎月の集会にその米を持っていきます。皆が差し出したお米を集めると一トン以上の小山のようになり、六十六世帯の困っている人たちを支援することができます。

軽く一握りの米を櫃に入れ、自分は腹八分、二分は人助け。十人分集まれば、一つの家庭を助けることができます。六十世帯を超す貧困家庭のお年寄りや障害者、孤児、未亡人たちを助けることができるのです。

今年は水害のため、来年二月にならなければ田植えができないため、この季節に収穫があるように、まず十月から担ぎやすいように袋分けした他の種子を配付しました。それで緊急の作付けをするだけでなく、季節に応じて蒔くことができるのです。

配付した米袋にはやはり静思語が印刷してあり、支援を受けていても、愛の心を啓発して少しずつ貯めれば、人助けができることを知ってもらっています。静思語の良い言葉を心に止め、善に解釈し、足るを知れば、貧困であっても天命と思って甘んじることができます。

これが善の種子を蒔くということであり、「苦を取り去った後、説法に替える」ことなのです。生活の安定を支援するだけでなく、精妙な一句が心に響けば、いつまでも役に立つのです。群集の中に分け入って奉仕し、貧しい人に幸福をもたらすのです。有形の物資は一時的に生活の安定をもたらします

が、無形の仏法は今生に影響するだけでなく、来世にまで持って行くことができます。

どんなに抗っても
人生の最期は老いて行き
病で衰えて行く。
世と争うのではなく
時間と争って
この体を使って
衆生を利するのである。

時間は絶え間なく過ぎて行き、知らぬ間に体はゆっくりと老いて衰えて行きます。気力も体力も衰えていくのは、歳月が残した痕跡ですが、いくら頑張っても徒労に終わるのです。

心の動きは外部の環境に影響され、賞賛、嫌気、阻害と変化し、好きなことは取り入れ、手に入らないと争うのです。人、事、物のために煩悩が起き、執着してしまうのです。しかし、どんなに抗い、目の前のことで争っても、結果は老いに向かい、病で衰えて行きます。自然の法則には誰も逆らうことはできません。

歳月は人を待ちません。ですから、この生命を善用すべきです。事や人、世と争ってはなりませんが、時間と争って、命の限り良能を発揮すべきです。人生を享受するだけなら業力が増えるだけ、と自分自身に警鐘を鳴らすべきです。早く目覚めて、この体で衆生を利するのです。

衆生の苦難に手をこまねいて傍観していてはなりません。どんな範囲が広くても、苦難の衆生がどれだけ多くても、大衆の縁と力を集めて助けることができるのです。

災害が起きるたびに、慈済ボランティアは社会に落ち着きを取り戻させ、被災者に寄り添っています。時間も自分のことも気にせず、使命と思ってただちに行動し、辛さを福に変え、甘んじてことを成せば、喜びが得られるのです。苦しんでいる人に対する慈悲と寄り添いは、慈済ボランティアだからこそできるのです。この無私の大愛が次の世代に引き継がれ、世の中がもっと平穏で平和なものになることを願っています。

善意の人々から離れてはならず、善の本分とその権利をなくしてはいけません。行動すればいいのです。皆さん、精進しましょう。

（慈済月刊六二四期より）

◎文・夏李蘭芳&Ruth Putryani Saragih　訳・本諦

待ちわびるアフガニスタン難民
街角から「希望の家」まで

国もなく、保護してくれる家族もいない
アフガニスタン難民の少年達は、道路で首を長くして待ち続け、
やっと愛で築かれた「希望の家」に迎えられた。

「僕は両親や家族と離れ離れになってしまった。今は母さんが恋しい」。十四歳のビシュミラ・ジョイアが初めて慈済のボランティアと出会ったとき、自分の遭遇したことを話してくれた。街中に野宿している彼は同じ故郷から来ている八人の友人と同様に、自分が生まれた土地から追い出され、アフガニスタンから遠いインドネシアへ避難して来た。

戦争が何年間も続いてきたアフガニスタンの住民数百万人は、住む場所を失くし、他国へ逃れた者も多く、中東難民の主な国の一つとなっている。

ジョイアは国から離れ、飛行機でインドまで行き、そこで乗りかえ、苦労の末マレーシアへ着いた。マレーシアから再び船で海を渡り、最終的にインドネシアに辿り着いた。「暗闇の中で船に乗るため、三十メートルの桟橋を歩き、小さい船から大きい船に移りました。海上でうねる大きな波を見て怖くなり、布で目を覆いました」。彼は涙を流しながら当時避難した時の様子を思い出していた。

インドネシアに着いてから、ジョイアと一緒に連れ立ってきた八人は、ジャカルタ国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の外で収容されるのを待っていた。二カ月も続いた野宿では、夜風が寒く、昼間は熱帯国家の暑い日差しを耐えなければならなかった。飢えを我慢しても、次の食事は見当たらない。安定した生活は程遠いものだった。

野宿少年は家族となった。

インドネシア国内では、一万四千人の難民が滞在している。就労は許されない上、収容所の数も不足している。収容所への入所許可を手にするために、多くの人々は国連難民高等弁務官事務所の外で

野宿して待っている。二〇一六年五月に、インドネシア・大愛テレビ局の総監である陳豊霊は、その中に未成年の子供がいることを知って、早速慈済ボランティアと一緒に訪ねた。

ボランティアは、まず家族から離散しているアフガニスタンの少年たちのために、一戸建ての家を借りて、中継ステーションとして「希望の家」を立ち上げた。現在は十人が常住している。飲食と宿泊を提供するほかに、ボランティアは英語やインドネシア語とコンピューター技術なども教えている。

住む場所が決まって、少年たちは心身とも安定を見せた。性格の明るいカムラン・アリーとホサイン・ラスーリは、他の少年の兄と師匠となった。学習の機会をとらえ、ジョイアは機械課程を選んだ。将来は優秀な電気・水道技師になりたいという。他の人はそれぞれが選んだ料理や散髪の技術を勉強している。

毎週の運動時間に、彼らはバレーボールやフットサル、水泳を練習している。体を鍛えるのと同時に、入所者同士互いに仲良くなれるからだ。ボランティアは彼らにボランティア活動に参加するように誘った。ジョイアと彼の友達は今まで休まず参加している。ジャカルタ中部で献血活動を行った時、彼らは計画から活動が終わるまで全て参加した。真面目な態度で、勇気を奮って献血もしたそうだ。

「初めての献血だったので怖かったです。でも、努力して恐怖を克服し一心に病気の人を救おうと思いました」とホサインは心の中にある困難と変化を話してくれた。

普段、ジョイア、ホサイン、そしてアリーは慈済のリサイクルステーションで資源回収を手伝い、各種のプラスティックをきれいに分けている。背中まで汗でぐっしょりになるが、皆と一緒に活動に

●中部ジャカルタ国連難民高等弁務官事務所の外の道路に、難民達はアスファルトの側にマットレスを敷いて休憩している。収容センターに入れるまで野宿して待っている。
（撮影・Ruth Putrayani Saragih）

●「希望の家」の少年達（前2列）はボランティアの制服を着て、慈済の配付活動に参加した。（撮影・LM Rizal）

参加することは楽しく、「仲間の一人になれたことは本当に良かった」とアリーは微笑んで答えた。

技術を磨き、将来のために準備する

「希望の家」の子供達は勉強を続けることにより、恨みが薄れ、悲観的になったり落ち込むことも少なくなった。ボランティア達は彼らのために、慈済志業での

実習に参加するよう勧めた。彼らは経理や事務の部署に入り、住み込みで技能を学び、将来実際に活用できるように準備を進めていた。

子供達はまだ学齢期にあり、勉強を中断してはならない。二〇一七年七月に新学期が始まった。五人の難民の子供、ハイダリ、ショクルラ、ジョイア、アルマン、レザは、キンカレンにある慈済大学で中学一年から高校三年までの授業を聴講した。

三カ月後、ヨヌス、フジャヅラ、ホリカ、ザイヌラも学校に入り、慈済大学で高校二年まで聴講した。

慈済大学の学生達は、彼らにとってインドネシア語は難しいことを知った。そこで、インターネットの翻訳機能を使って、彼らの学習を熱心にサポートし、インドネシアの学校生活と文化に慣れさせた。もっとも重要なのは、インドネシア語でのコミュニケーションを彼らに教えることだ。

風雨を経験してきた難民の子供達は、学校から離れて数年、やっと他の子供たちのように勉強し、新しい友達や先生と活動することでができたことで、しばしの間、異国での苦難を忘れることができるだろう。落ち着ける場所を得たなら、

未来に希望を抱き、夢を求めることもできる。心では常に家族を思っているだろうが、現実に向き合い、強くならなければならない。

勇気を身につけ、最高の自分に

「希望の家」に住んでいるジョイアや、他の子供達にとって、インドネシアはあくまでも一時的に滞在できる国でしかなく、国連難民高等弁務官事務所が彼らに定住先の国をアレンジしてくれることになっている。

「希望の家」に在住入所してから一年が過ぎた頃、ホサインはオーストラリアへの移住を許可された。二〇一七年五月に、彼はジャカルタ空港で皆に別れを告げた。彼にとって、苦楽を共にしてきた「希望の家」の仲間たちと慈済のボランティアは家族同然で、別れるのはとても辛かった。

「最高の自分になろう。決して怠けたり、文句を言ったりしないで」。これはホサインが友達に残した心からの祝福の言葉だ。戦争の被害者になったものの、長い時間をかけて、あきらめないことと勇気を持つことを、彼らは知ったのである。

（慈済月刊六二〇期より）

善の扉

「慈済ものがたり」をご自宅までお届けします

各慈済連絡所では無料でお配りしています。
ご自宅までお届けする場合の郵送料は年間ＮＴ＄１２０。
２冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください
日本に在住されている方は慈済基金会日本支部にご連絡ください

●郵送料のお振込み：（月１回発行。１冊）
台湾郵局口座：１９９０５７８１　口座名：慈濟傳播人文基金會
●読者サービスセンター電話番号：
０２-２８９８９０００内線１１６５
●上記の郵送料は台湾国内に限ります。
海外または離島の方は読者サービスセンターにお電話ください。
●インターネットでもご覧いただけます。
ＵＲＬhttp://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=7

オンラインでの送付申し込みはこちらへ

慈済大記事十一月

訳・済運

11・01	本日から7日まで世界宗教会議がカナダのトロントで開かれている。静思精舎の德淵師匠、德澍師匠、剃髪前の尼僧・陳美玲及び慈済基金会人文志業発展処の何日生主任、宗教処職員の呂宗翰らが慈済を代表して参加し、開幕式で證厳法師の祝辞ビデオが放映された。4日にはフォーラムを主催し、精舎の自力更生と慈済が推進した素食運動、リサイクル活動及び宗教的観点から探求した気候の変動に対処する行動などを紹介した。
11・02	ミャンマー中南部で7月と8月に洪水が発生し、全国で26万ヘクタールの農地が被害を被り、農民の生活に支障をきたした。台湾、マレーシア、ミャンマーの慈済ボランティアは11月2日から6日まで、ヤンゴン省カヤンとトングァ、キョルタン及びバゴ省カワなどで農民が雨季になる前に種まきができるよう、グリーンピースの種を配付した。
11・03	慈済は「2018台中世界花博覧会」に大愛環境保全科技人文館を出展し、2018年11月3日から2019年4月24日まで土石流が起きる原理を知ることができる模型やペットボトルからの再生、温暖化による気候の変動、菜食による二酸化炭素排出量の削減などを紹介し、大衆に環境保全で地球を守ることを訴えている。
11・04	慈済骨髄幹細胞センター主催の「2018アジア血液及び骨髄移植大会慈済研討会」が台北国際会議場で開催された。アジア地区やアメリカ、オランダなどの学者が参加して各国の骨髄移植の現状報告と展望、臍帯血による新しい治療法を紹介すると共に、それぞれの地域性の違いによる方法などを討論した。

11・06	大愛テレビのニュース特別報道番組《衣之旅》が「2018デルタ電子エネルギーと気候特別賞」の中のニュースメディア・テレビ部門賞を獲得した。同番組は記者が中国とバングラデッシュを訪れて、衣類の製造と消費、リサイクル、再生などの過程を取材したもので、一般大衆にファッションの裏に潜む環境へのダメージを訴えている。
11・07	慈済基金会はタイ国家発展研究所（NBI）国際民間部門の「国家発展終身成就賞」を獲得し、慈済タイ支部の陳予虹副執行長が代表で受け取った。
11・08	アメリカ慈済ボランティアと人医会医療看護チーム一行50数人は8日から11日まで順次、メキシコ、ザカテペク、ホチミルコ、イツタ

	パラなどで延べ6000人余りを対象に、施療と散髪の奉仕、衛生教育などの活動を行った。
11・09	台湾が高齢化社会に突入するのに伴い、長期ケアを強化するために、慈済基金会は林碧玉と荘淑婷をそれぞれ、発起人と副発起人とした「長期ケア推進センター」を設立した。
11・10	アメリカ、カリフォルニア北部の山火事は今月8日から燃え続け、10日現在で既に6000棟余りの住宅が消失し、15万人を超える人が避難している。慈済ノースカリフォルニア支部のボランティアは10日から支援活動を開始し、順次チコ市、グリドリー市、オロヴィル市で被災者を慰問すると共に、毛布を配付している。また、22日にはチコ市連邦災害復興センターで買物カードを配付する。

11・13	證厳法師は「人心の浄化、平和な社会、災害のない世の中」という3つの願いに引き続き、本日、三重志業パークで行われた「2018年慈済海外委員及び慈誠養成精神研習会」において、誰もが新たな3つの願い、「人と和して共に福田を耕す。平和で栄えた社会。平穏な世の中」を持つよう呼びかけた。そして、17日から始まる歳末祝福感恩会ではこの新たな3つの願いで以って大衆が手を携えて努力するよう激励する。
11・17	アメリカ、フロリダ州は10月上旬にカテゴリー4のハリケーンに襲われ、大きな被害が出た。慈済ボランティアは視察後、本日、重被災地のパナマ市で674世帯に買物カードを配付した。
11・19	慈済大学は慈済基金会と共に19日から30日まで校内で慈悲の科学展を催し、水陸両用浄水ボート、ジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）、移動厨房、簡易仮設住宅など災害支援用に開発した製品を展示している。
11・24	トルコ慈済ボランティアは台湾慈済のケアチームと共に24日と25日、サルタンガジ市のシリア人学生が通うマナヘル学校で6400世帯のシリア人を支援する配付活動を行った。
11・25	慈済基金会2018年新芽奨学金の今年最後の授与式が花蓮静思堂で行われ、665人の弱者家庭の子供たちが受け取った。本年度最初の奨学金授与式は9月23日に宜蘭羅東支部で行われ、今日まで台湾全土で29回行われ、8628人の子供が恩恵を受けている。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
FAX:886-4-36021123

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301
FAX:886-3-8563604

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ
TEL:1-760-7686631

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス
TEL:44-20-88699864

フランス
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１８年１２月１９日発行・２６４号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

最高の笑顔　慈済人医会シリーズ

メキシコ地震発生から１年が経過し、アメリカや台湾の人医会は４度目の施療を行った。張秉東医師はトラキルテナンゴ市で診察し、医療を提供するだけでなく、大愛を広めた。

（撮影・鄭維元　メキシコ・トラキルテナンゴ市 2018 年９月１日 ）

慈済ものがたり